

すくわく 活動報告書

テーマ「時間によって違う自然」

対象年齢：2歳児クラス以上

【テーマ】

子どもたちは園庭や戸外で過ごす中で、朝・昼・夕方や、晴れ・雨といった条件の違いに日常的に触れている。年齢や経験によって受け止め方はさまざまで、変化に自然に馴染んで遊びを続ける子がいる一方で、「さっきとちがう」「なんで影がのびるの?」「雨だと地面が変わるのはどうして?」など、変化そのものを不思議に思い、確かめたくなる子もいる。こうした“順応”と“問い”の両方が日々の活動の中に重なっていることから、時間の経過によって自然が変わることを手がかりに探究を深めるテーマ設定が適していると考えた。

【はじめに】

幼保連携型認定子ども園そあの保育は、自然と時間の流れに触れながら、子どもたちの感受性を育むことに力を入れています。「自然から学ぶ」「時間を忘れて遊ぶ」「関わりあう生活」「ホンモノの食事」の4本柱を中心に、園児たちは日々、身近な自然と向き合い、全身でその変化や魅力を感じています。都内に位置しながらも、近隣にある「都立水元公園」や園が借りている畑、さらには園庭の2メートルほどの山やビオトープといった自然豊かな環境が、子どもたちの遊び場となっています。これらの場所で、子どもたちは1年を通して季節の変化を体験し、自然との触れ合いを楽しんでいます。特に、自然の中での遊びは、ただ遊ぶだけでなく、自然の一部としてその変化や時間の流れを肌で感じるすることができます。また、園での自然体験には、公園で植物に触れるだけでなく、火おこしや植物の育成、さらには日常生活の中で気づかないうちに自然のありがたみを感じる経験も含まれています。例えば、植物を育てる過程では、子どもたちがその成長を見守りながら、日々の変化に気づき、時間の経過を理解する力を養います。こうした経験を通じて、子どもたちは「自然の変化」を直感的に学び、時間の流れを感じることができます。園生活を通じて、子どもたちは単なる自然体験を超え、時間の大切さや、自然が与える恵みを理解することができるのです。自然の中で過ごすことで、子どもたちは自分たちの身近な世界が時間とともにどのように変わるのか、またその中で自分たちがどのように関わっていくのかを学ぶことができます。

保育を展開するにあたり、子ども達が自分の発想を元に主体的に活動をしていくには、いかに大人が予測をして準備をしていくかがとても大切だと考えています。さらには、あえて大人がすべてを準備するのではなく、子どもと一緒に発想を元に準備することも時には必要だとも考えます。保育士は子どもにどんなことを経験させてあげたいか、自分が子どもの時に夢中になったことはなにか、今の子どもの姿から想像できる発展は何だろうか…そのような想像を膨らませ続け、子ども達の発想に少しのスパイスを加えることで、子どもの経験はさらに豊かになるのではないかと考えます。時間によってちがう自然の力を借りながら、今後の保育も考えていきます。

【活動報告】



【1.方法によって変わる自然】・・・幼児クラス

- ① 「これ、雑草じゃない？」と職員が用意したトウモロコシの苗を指さして男の子が言うと、「雑草じゃないよ、ポットに入っているから何かの野菜だよ」と子どもたちで話し始めた。育てて確認してみることにし、葛飾区から借りている畑に植えてみた。
- ② 職員が用意した苗以外の野菜を育ててみたいという話になり、夏野菜の種を買いにいった。どこに売っているかを話し合うと、「〇〇にこの前買い物に行ったときに種あったよ！」と子どもが教えてくれたため、近くのスーパーへ行くことにした。
- ③ 種を購入したが、育て方がわからないため、調べてみることにした。園内にある野菜の育て方の図鑑を見て土の深さや種の撒き方などを自分たちでみて、やってみることにした。まずは牛乳パックに土を入れ、種を植えることにした。
- ④ 種を植えて数日、芽が出てきたことを発見した。そのまま水やりをしながら育てて行ったが、暑さで土が乾くのが早く、枯れてしまった。
- ⑤ なんで枯れてしまったのかを、いつも畑の手入れをしている用務職員に聞きにいった。「大切なのは水と肥料」と教えてくれ、「肥料って入れたことないよ」「水も上げ忘れちゃった日があるんだ」と自分たちの育て方を振り返っていた。

【振り返り】

普段苗から育てることが多いが、今回は種から育て始めた。まだまだ弱い種は育つまでが難しく、子どもたちの自発的な育成は難しかったが、枯れてしまったことにより野菜を育てるのに必要なものを教えてもらうきっかけができたと考ええる。

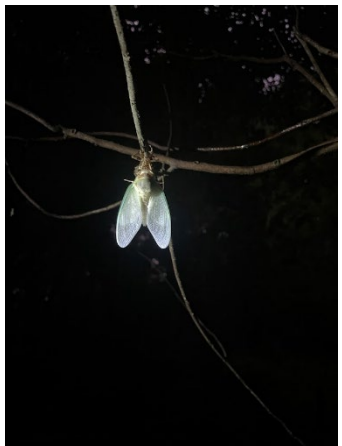


【2.天気によって変わる自然】・・・3.4.5 歳児

日ごろから散歩に行く水元公園に、ザリガニ釣りに行った。とにかく早く釣りたくて始めた子どもたちはいつもたくさん釣れるスポットで釣り始める。とはいえずっと日向だったため少し休憩をしたり、ほかの遊びをしていると、「あっ！さっき釣ってた場所が日陰になった！」と、子どもたちが気づく。時間が経つことにより、日が傾き、影の場所が変わったことを体験することができた瞬間だった。

【振りかえり】

風の有無によって変わる雲の動きや太陽の見え隠れ、時間によって変わる日陰の位置など、下を向いてじっとしていることの多いザリガニ釣りだからこそ気づくことのできた変化だと考える。



【3.時間によって変わる生き物】・・・4.5 歳児

「カブトムシを捕まえない」から始まり、夜のこども園を行うことにした。カブトムシを捕まえるための仕掛けを作るために図鑑で調べ、リンゴやはちみつ、焼酎、イースト、いちごジャムなどをスーパーに購入しに行く。「リンゴをつぶしたい」と子どもたちは考え、石や木を使って思い思いにリンゴをつぶし始める。つぶしたリンゴや砂糖、はちみつなどを「甘いほうがカブトムシたちはうれしい！」と自分たちなりにどうしたら甘くなるかを考えて配合した。それを夕方水元公園の「カブトムシが来そうな木」に仕掛け、夜のこども園で観察をしに行った。その日はカブトムシの出現が多く、仕掛けにもついており、子どもたちは大喜びだった。また、蝉の羽化も見ることができ、日中には見られない生き物の生体を観察することができた。

【振り返り】

仕掛け自体はカブトムシの仕掛けにふさわしいものとはいえない難いものだったが、その日のカブトムシの数も多く、偶然仕掛けについている様子を見ることができた。また、羽化する様子も見ることができ、いつも捕まえている蝉とは違う色も見ることができた。



【4.時間によって変わる自然の感触】・・・2.3.4.5 歳児

暑くなってきて水遊びを楽しむ子どもたち。子どもたちの水遊びに季節は関係なく、秋・冬になっても水を使って遊んでいた。とはいえ、冬の水遊びは冷たく寒く、子どもたちもやりたいけど寒い…という葛藤が見られた。「早く暑くなればいいのになあ…」「そうだ！お風呂にしたらいいんだ！」とドラム缶風呂に入りたいと子どもたちから言い始める。火おこしをしてドラム缶に水をため、「まだかな」と言いながらドラム缶の中の水を触り、少しずつ温くなる様子も感じることができた。

無事、お湯が沸き、お風呂に入ると「あったかい！」と喜び、お湯から上がり着替えるまでの間も「冬なのにまだ体がぼかぼかしている！」「みて！体から湯気がもくもく出てる！」と楽しんでいた。

【振り返り】

通年通して水遊びを楽しむ子どもたちは、年々「どうしたら楽しめるか」を自分たちの経験から繋げて考えられるようになってきた。水には触れていたい、でも水は寒い…と考え、お湯にしてしまおう！と自分たちで考えた結果である。

【まとめ】

本取り組みでは、子どもたちが自然と関わる中で、「時間の経過がもたらす変化」に自ら気づき、その変化に対して試行錯誤しながら関係を築いていく過程を大切にしてきた。単なる体験の積み重ねではなく、気づき・失敗・再考といった循環が生まれている点に本質がある。

活動の出発点には、常に子どもたちの違和感や疑問がある。苗を見て「雑草ではないか」と感じたことは、見た目だけでは判断できないという自然の曖昧さへの最初の接触であった。その曖昧さを解消するために「育てて確かめる」という行為へ向かったことは、結果をすぐに求めるのではなく、時間をかけて変化を見ようとする姿勢の芽生えといえる。さらに、栽培を進める中で発芽という変化には気づけた一方、その後の枯死という結果に直面したことで、自然は一方向に成長するものではなく、関わり方によって変化の方向が左右される存在であることを体験的に理解していく。水やりや肥料といった要素に後から意味づけがなされていく過程は、「時間が経てば変わる」のではなく、「条件が重なったときに変化が起きる」という認識への深まりを示している。

また、戸外での遊びにおいては、同一の場所であっても時間によって環境が変化するという事実、自分たちの体感を通して気づいていく。日向で暑さを感じ、離れた場所が、時間の経過とともに過ごしやすい日陰へと変わる。この経験は、空間を固定的に捉えるのではなく、「時間とともに状態が移ろうもの」として環境を捉え直す契機となる。ここでは知識としての理解ではなく、身体感覚と結びついた気づきが生まれている点に意味がある。

さらに、生き物との関わりでは、「時間帯」という視点が加わる。昼には見られないカブトムシやセミの羽化に出会った経験は、生き物が常に同じように存在しているのではなく、それぞれの時間の中で活動していることへの理解につながる。仕掛けづくりの過程においても、「甘いほうが集まる」という仮説を立て、材料や配合を工夫する姿が見られたが、ここでも重要なのは即時的な正解ではなく、時間をおいて結果を確かめるという構造である。つまり、自然に対して働きかけ、その応答を待つという関係性が形成されている。

加えて、季節と温度の変化に対する関わりでは、「環境に適応するための工夫」が子どもたち自身から生まれている。寒さによって水遊びが制限される状況を前にして、「やめる」のではなく「変える」という発想に至った点が特徴的である。ドラム缶で水を温める過程では、温度が徐々に変化していく様子を繰り返し確かめる姿が見られ、ここでも時間の蓄積によって状態が変わることを身体的に理解している。また、入浴後の体温の持続や湯気といった現象に目を向けることで、目に見えにくい変化にも意識が向いている。これらの経験に共通しているのは、子どもたちが「変化の結果」だけでなく、「変化に至る過程」に関わっている点である。自然は常に変化しているが、その変化は連続的であり、時に緩やかで、時に急激である。その過程に関わり続ける中で、子どもたちは予測し、試し、修正するという循環を繰り返していく。うまくいかなかった経験も含めて積み重ねることで、「時間が関係するからこそ自然は変わる」という理解が、知識ではなく実感として形成されていく。

本取り組みは、時間という視点を通して自然を捉えるだけでなく、子どもたち自身がその時間の中に身を置き、自然との関係を更新し続けていく過程を支えるものである。結果として、自然を受け身で観察するのではなく、働きかけながら応答を待つという、より主体的で探究的な関わりが育まれている。